

深イ〜話!

No.30

少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。
殊に母親の溺愛は近所の物笑いの種になるほどだった。
その母親が姿を消した。
庭に造られた粗末な離れ、そこに籠もったのである。結核を病んだのだった。
近寄ると周りは注意したが、母恋しさに少年は離れに近寄らずにいらなかった。

しかし、母親は一変していた。

少年を見ると、ありったけの罵声を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第投げつける。青ざめた顔、長く乱れた髪。荒れ狂う姿は鬼だった。
少年は次第に母を憎悪するようになった。悲しみに彩られた憎悪だった。
少年六歳の誕生日に母は逝った。

「お母さんにお花を」と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して棺の中を見ようとはしなかった。

父は再婚した。少年は新しい母に愛されようとした。だが、だめだった。

父と義母の間に子どもが生まれ、少年はのけ者になる。

少年が九才になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。

その頃から、少年の家出が始まる。

公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで体を二つ折にして寝たこともある。そのたびに警察に保護された。何回目かの家出のとき、義母は父が遺したものを処分し、家をたたんで蒸発した。

それからの少年は施設を転々とするようになる。十三歳のときだった。

少年は知多半島の少年院にいた。もういっぴしの「札付き」だった。

ある日、少年に奇跡の面会者が現れた。あの家政婦のオバサンだった。

オバサンはなぜ母が鬼になったかを話した。死の床で母はオバサンに言ったのだ。

「私は間もなく死にます。あの子は母親を失うのです。幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。

憎らしい母なら、死んでも悲しまないでしょう。

あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。そのほうがあの子は幸せになるのです」

その話を聞いて、呆然となった。自分はこんなに愛されていたのか。

涙がとどめなくこぼれ落ちた。札付きが立ち直ったのはそれからである。

作家・西村滋さんの少年期の話である。